

15.2 地域の魅力を高める屋外公共空間の景観向上を支援する計画・設計及び管理技術の開発

15.2.1 国際的観光地形成のための屋外公共空間の評価支援・設計及び管理技術に関する研究

担当チーム：特別研究監付（地域景観ユニット）

研究担当者：葛西聡、松田泰明、笠間聡、

大竹まどか

【要旨】

本研究は、魅力的な観光地の条件を屋外公共空間の面から明らかにすることで、国内における観光地等の効果的かつ効率的な魅力改善に寄与することを目的としたものである。平成 29 年度は、過年度までの研究成果として得られていた「観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間のパターン」に基づき、観光地等の具体の空間整備事例の調査およびそれらの整備内容と「パターン」との適合に関する分析、国内の観光旅行経験者を対象としたアンケート調査とそれに基づく国内観光客の観光地に対する評価傾向に関する分析、有識者意見交換会、これらを踏まえた平成 30 年度以降の研究方針の検討などを行った。

キーワード：観光地、観光振興、魅力向上、屋外公共空間、景観改善、パタンランゲージ

1. はじめに

1.1 研究の背景・目的

近年、地域振興や産業振興などの観点から「観光」にさらなる期待が集まる一方、観光地の魅力の改善も多くの地域で喫緊の課題となっている¹⁾²⁾。

その際、観光振興や観光地としての魅力向上、特に近年課題となっている滞在型観光の促進や観光地における滞在時間向上を考える上で、景観や空間の質や機能は非常に重要である³⁾。しかしこの点で、日本の観光地は海外の観光地に大きく見劣りしているのみならず、実行されている改善の取り組みの面でも効果的なものとなっていない事例がみられる。これには、魅力的な観光地を実現するのに真に必要な取り組みや、その優先順位の判断が容易ではなく、これに必要な知見や技術の確立がなされていないことも一因となっている。

そこで本研究では、滞在型観光を念頭に、魅力的な観光地の条件を屋外公共空間の面から明らかにすることを目的としている。これにより、観光地等における屋外公共空間の課題の抽出を可能とし、効果的かつ効率的な屋外公共空間の整備・改善手法の立案を支援する。

1.2 研究課題および研究内容

本研究の目的は、滞在型観光を念頭に、魅力的な観光地の条件を屋外公共空間の面から明らかにすることで、その課題の抽出や整備・改善手法の立案を支援し、日本全国における国際的観光地形成に寄与することである。

このために平成 28～33 年度の計画で、以下のような研究に取り組むこととしている。

- ① 屋外公共空間の魅力向上に寄与する要素・要因の抽出及び分析
- ② 評価の高い（低い）屋外公共空間の「パターン」の整理・体系化
- ③ 屋外公共空間の魅力に関する評価・診断（アセスメント）手法の構築
- ④ 屋外公共空間の構成要素に関する設計・管理・利活用技術の提案
- ⑤ 観光地における魅力的な屋外公共空間の創出を支援する技術資料のとりまとめ

平成 29 年度については、このうちの①～③について研究を進める計画としており、本稿ではこの結果について、2 章以降に報告する。

1.3 用語等

本研究でいう「屋外公共空間」とは、観光地の屋外空間のうち、その土地の所有者に関わらず、パブリック、すなわちその土地を訪れる観光客が一般的に利用することができる空間及びそこから見通せる範囲を指すこととしている。

したがって、公共の所有する道路や公園、広場はもちろんこれに含むが、公共の所有でも一般にアクセスすることができない立入制限区域等は含まない。他方、企業

や個人の所有する土地であっても、自由に立ち入ることのできる敷地の部分はこの「屋外公共空間」に含み、さらには建物の壁面や屋根の意匠、柵や窓の向こう側などパブリックな敷地の部分から見通せる範囲も含むものとしている（図-1）。

2. これまでの研究成果

前年度（平成28年度）までに得られていた研究成果の概要は以下のとおりである。

2.1 全国で特に評価の高い温泉街型観光地の共通点としての「6のパターン」

建築家・都市計画家であり研究者でもあるC.アレグザンダーは、著書「A Pattern Language」⁴⁾において、魅力的なまちの実現に寄与するようなまちや建築の姿の断片を言語的な記述として収集・整理し、253の「パターン」という形で提示した。これらの「パターン」は、アレグザンダーによる具体的な建築や都市の洞察・研究・実践の積み重ねから導き出されたもので、アレグザンダーはその方法論も含めて、都市計画的なトップダウン型のまちづくりではなく、ボトムアップ型のまちづくりの方法として提案している。

本研究でも、アレグザンダーのとした手法同様、具体的な観光地事例の分析から「共通点」を抽出し、これを「魅力的な滞在型観光地に求められる要件の候補」として検討するという同様のアプローチを採用することから、ここでも「パターン」の語を用いることとした。このように、全国で特に評価の高い観光地の共通点は、観光地の魅力を高いものとするための「パターン」である可能性がある。

そこでまず、全国でも特に評価の高い6の温泉街型観光地を対象に、現地調査およびヒアリング調査を行い、それらの屋外公共空間の共通点の抽出を行った。調査対象とした観光地は、黒川・由布院・有馬・城崎・加賀山中・野沢の各温泉街で、観光ガイド誌⁵⁾や温泉街を対象としたランキング調査の結果⁶⁾などを参考に選定した。

これらの共通点を「観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間のパターンの候補」（試案）として整理したのが図-2である。

なお、温泉街型観光地を当初の調査分析の対象としたのは、「温泉街型」の観光地が以下のような特徴を備え、本研究の目的によく適合すると考えられたためである。

- ・「物見」よりも「滞在」に重点が置かれており、個別の「物見」の対象（例えば文化財や歴史的資源など）の有

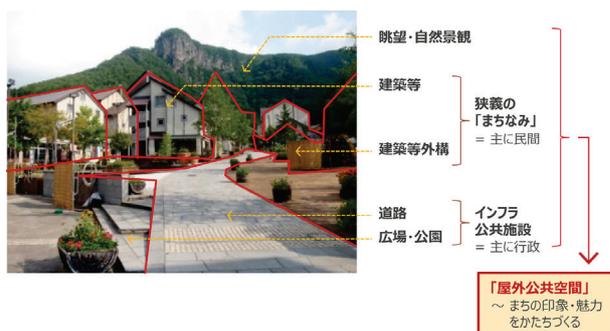


図-1 研究の対象とする「観光地の屋外公共空間」のイメージ（一例）

① 屋外での時間の過ごし方の提供

観光客に散策や回遊を促すものとして、観光地の側から、屋外に繰り出す理由や目的が提供されていること。それが広く観光客に受け入れられていること。



①の例：黒川温泉（入湯手形）

② 観光地のアイデンティティとなる象徴景

当該観光地に滞在することの魅力強く印象づける風景（象徴景）が存在すること。そのような象徴景は往々にして、当該観光地の名刺代わりとなり、観光ガイドの扉写真や観光ポスター等に広く採用されている。



②の例：黒川温泉

③ 豊かな自然と一体化した街並み

周囲に山林や農村などの豊かな自然環境があり、観光地の中核からもそれらを見通すことができること。また、街中にそれらの自然環境とつながりのある要素がちりばめられていること。これらにより、周囲の豊かな自然と街並みの一体感が感じられること。



③の例：由布院温泉

④ 景観に優れた適度な長さの散策路

景観に優れた環境の中をゆっくりと散策できる環境が整っていること。それにより、日常とは異なるその地ならではの世界観に十分に没頭できること。



④の例：有馬温泉

⑤ 散策や滞留の拠点となる広場等

散策や滞留の拠点となり、休憩、写真撮影などに利用できるゆとりある広場等が、観光地の中核に存在すること。そのような広場等では、居ながらにして、観光地の風景や風情を心ゆくまで楽しむことが出来る。



⑤の例：小樽

⑥ 歩行者優先の街路空間

往来する自動車に観光を阻害されることのないこと。



⑥の例：小布施

図-2 観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間のパターンに関する試案（「6のパターン」）

無やその良し悪しに観光地の評価が影響を受けにくい。

- ・独立性の高い集落状の形態を成しているものが多く、分析の対象として扱いやすい。
- ・類似の観光地が全国に多く分布している。
- ・類似の観光地間での客観的・相対的な魅力評価が広く実施されており（民間調査会社の全国人気温泉地ラン

キングなど)、評価の高い観光地の抽出が既存資料を利用して行える。

2. 2 全国 12 の温泉街型観光地の現地調査と「6 のパターン」への適合度評価の試行

仮説として得た「6 のパターン」については前掲の図のとおりであるが、これらはわずか全国 6 の温泉街型観光地の共通点から導き出されたもので、普遍的に観光地の魅力向上に寄与するパターンであるとの裏付けのあるものではない。

そこで、これらのパターンに対する評価基準を仮に設定し、全国 12 の温泉街型観光地を対象とした適合度評価の試行を行い、「6 のパターン」と各観光地の屋外公共空間の適合の状況について確認することとした。評価の試行にあたり、設定した評価基準は表-1にまとめたとおりである。評価は、◎・○・△・×の 4 段階で行うこととし、それぞれに 1.5 点・1 点・0.5 点・0 点の 0.5 点刻みの点数を与え、6 のパターンについて合算する方式とした(最高 1.5 点×6 項目=9 点満点)。

この評価基準を用いて、全国 12 の観光地の屋外公共空間について評価を試行した結果を表-2 に示す。

表-2 からは、当初現地調査の対象とした 6 観光地のうち、野沢を除いては、適合点数が 6.5~8.5 点と高く、草津についても同様に 8.0 点という高得点になった。一方で、北海道内の 5 観光地では適合点数が 4.0~6.0 点と比較的低い点数に留まった。

なお、ここで適合を評価した「6 のパターン」は、元来、当初現地調査の対象とした 6 観光地(2.1 節)の共通点から抽出されたものであるため、それら 6 観光地で適合度が高くなるのは自明である。しかし、全国的にも評判が高く、2013 年以降景観街並み整備にも継続して取り組まれている草津と同様に適合度が高く、全国的な評価ではそれらに劣る北海道内の温泉街で適合度が低くなったことは、それらの温泉街の屋外公共空間に明らかな性格の違いのあることを示唆していると考えられる。

表-1 「6 のパターン」の試案に対し設定した評価基準

1. 屋外での時間の過ごし方の提供	評価の基準
観光客に散策や回遊を促すものとして、観光地の側から、屋外に繰り出す理由や目的が提供されていること。 それが広く観光客に受け入れられていること。	◎ 観光地の側からの積極的な提案・提供がある。 ○ 多くの観光客の利用する過ごし方があるが、観光地からの積極的な提案・提供によるものではない。 ↳ 時間の過ごし方が提案・提供はされているものの、利用が限定的である。* △ 時間の過ごし方が提案・提供はされているものの、利用が限定的である。 ↳ 多くの観光客の利用する過ごし方があるが、観光地からの積極的な提案・提供によるものではない。* × そのような時間の過ごし方の提案・提供がない。
2. 観光地のアイデンティティとなるような象徴景	評価の基準
当該観光地に滞在することの魅力や強く印象づける風景(象徴景)が存在すること。 そのような象徴景は、往々にして、当該観光地の名刺代わりとなり、観光ガイドの扉写真や観光ポスター等に広く採用されている。	◎ ○に加え、なんらかのプラスアルファが存在する。 ○ 象徴景があり、メインストリート等に一致する。 △ 象徴景があるものの、メインストリート等に一致しない。 × 確たる象徴景が存在しない。
3. 豊かな自然と一体化した街並み	評価の基準
周囲に山林や農村などの豊かな自然環境があり、観光地の中核からそれらを見通すことができること。 街中にそれらの自然環境とつながりのある要素がちりばめられていること。 これらにより、周囲の豊かな自然と街並みの一体感が感じられること。	◎ 周囲の自然への見通しと、近景部分に配置された自然要素の双方が存在する。 ○ 周囲の自然への見通しが存在する。 ↳ 周囲の自然への見通しと、近景部分に配置された豊かな自然要素のいずれかが存在する。* △ 周囲に豊かな自然は存在するものの、観光地のメインエリアからは見通せない。 × そのような自然の気配に乏しい街並みである。
4. 景観に優れた適度な長さの散策路	評価の基準
景観に優れた環境の中をゆくりと散策できる環境が整っていること。 それにより、日常とは異なるその地ならではの世界観に十分に没頭できること。	◎ ↓の散策路が存在し、メインストリートに一致する。 ○ 景観に優れた、適度な長さの散策路が存在する。 △ 景観に優れた散策路は存在するものの、散策路の長さやアクセス等に難がある。 × 景観に優れた散策路が存在しない。
5. 散策や滞留の拠点となる広場等	評価の基準
散策や滞留の拠点となり、休憩、写真撮影などに利用できるゆとりある広場等が、観光地の中核に存在すること。 そのような広場等では、居ながらにして観光地の風景や風情を、心ゆくまで楽しむことが出来る。	◎ ↓に合致する広場等があり、眺望に優れている、または風景上のハイライトに存在する。 ○ 散策や滞留の拠点となる広場があり、散策ルートやメインストリートに接している。 △ あるが、町外れや路地裏等にあり、立地が良くない。 × そのような広場等が存在しない。
6. 歩行者優先の街路空間	評価の基準
往来する自動車に観光を阻害されることのないこと。	◎ メインストリート等の空間が、歩行者専用である。 ○ ↑の空間が、歩車共存の空間で、自動車交通量もさして多くない。 △ ↑の空間が、車優先の一般的な歩車分離の街路構成だが、自動車交通量はさして多くない。 × ↑の空間について、自動車交通量が多い。

* 赤字は、2.4節の分析の時に変更して採用した基準。

表-2 各観光地「6のパターン」への適合の評価結果および以降の分析に用いる温泉街全体の魅力度評価値

	黒川	由布院	有馬	城崎	加賀山中	野沢	登別	洞爺湖	定山溪	阿寒湖	層雲峡	草津
1. 屋外での時間の過ごし方の提供	◎ 入湯手形	○ 店舗の集積	○ 店舗の集積	◎ 外湯めぐり	◎ 鶴仙溪川床	◎ 外湯	○ 地獄谷散策	×	△ 足湯・かっぱめぐり	○ 店舗の集積	×	○ 湯畑周辺散策
2. 観光地のアイデンティティとなるような象徴景	◎ 丸鈴橋	○ 湯の坪街道	○ 金の湯	◎ 大鷲川柳並木	△ 鶴仙溪川床	△ 大湯・麻差	△ 地獄谷	△ 洞爺湖・中島	○ 豊平川渓谷	△ 阿寒湖	○ キャニオンモール	◎ 湯畑と街並み
3. 豊かな自然と一体化した街並み	◎	◎	◎	◎	◎	△	△	△	◎	△	◎	◎
4. 景観に優れた適度な長さの散策路	◎ 川端通り等	◎ 湯の坪街道	◎ 湯本坂等	◎ 大鷲川沿い等	◎ 鶴仙溪/ゆげ街道	×	△ 地獄谷周辺	△ 湖畔遊歩道	△ 豊平川渓谷	○ 湖畔遊歩道	△ モール200m	◎ 湯畑周辺
5. 散策や滞留の拠点となる広場等	◎ 丸鈴橋	△ 駅前/全鱈湖	○ なな橋/金の湯	◎ 大鷲川の石橋群	○ 菊の湯前広場	△	○ 泉源公園	◎ 湖畔遊歩道	◎ 月見橋	◎ 湖畔公園	○ キャニオンモール	◎ 湯畑周辺
6. 歩行者優先の街路空間	○	○	○	○	△	○	○	×	○	△ 中央通り	◎ キャニオンモール	○
上記6のパターンへの適合点数 (最大9.0)	8.5	6.5	7.0	8.5	6.5	4.0	4.5	4.0	6.0	5.0	5.5	8.0

民間調査会社による温泉地ランキング調査¹⁰⁾によるアンケート調査結果からの引用

「もう一度行ってみたい」の得票数	1094	1793	979	820	557	383	1503	652	562	501	473	1824
					※ 加賀温泉郷							

2.3 パターンへの適合度と観光地の魅力評価との関係に関する分析

次に、観光地の屋外公共空間に関する「6のパターン」への適合と、観光地の総合的な魅力とがどのような関係にあるかについて分析を行った。

しかしここで用いるのに適当な、各観光地の魅力を統一的に、比較可能なかたちで示す指標にはなかなか適当なものがない。例えば、観光入込み客数や宿泊者数などの統計調査資料もあるが、観光地の立地や利便性などによる影響も大きいと考えられ、各観光地を横並びで比較するには適さない。各観光地の観光協会等にて、独自に観光客や宿泊客にアンケート調査を行い、満足度や再来訪意欲について把握しているケースは多いと考えられるが、結果が公表されていない。そこで今回は、毎年いくつかの民間の調査会社等が実施し結果を公表している温泉地ランキング調査の調査結果の中から、最も調査内容が充実しているもの⁷⁾を用いて採用することとした。

分析に採用した魅力度指標は、前掲表-2の下部に併記した。これは、平成27年8月にインターネット上で実施されたアンケート調査⁷⁾において、「これまでに行ったことがある温泉地のうち『もう一度行ってみたい』温泉地」との設問に対して回答された数を集計したもので、1位は箱根温泉の2,024票とされている(複数回答5つまで、回答者数12,062人)。

この調査⁷⁾による「もう一度行ってみたい」の得票数を縦軸に、2.2節表-2による6のパターンへの適合得点を横軸にとってこれらの関係を図化したものが図-3である。図中の2本の回帰直線のうち、実線のは草津・

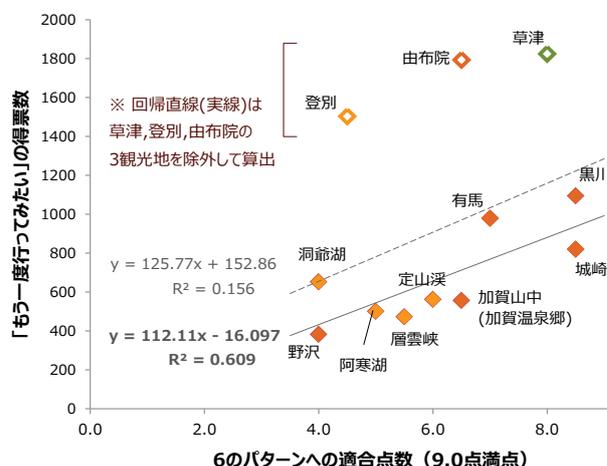


図-3 パターンへの適合点数と温泉街の魅力評価値との関係

登別・由布院の3観光地を除いた9観光地のプロットについて回帰直線を引いたもので、破線の回帰直線に比較して強い相関が確認できた。これら3観光地に共通するのは、それぞれ北海道・九州・北関東を代表する一大温泉地であることであり、したがってこれらの知名度、訪れる人の数、大衆的な評価などが「もう一度行ってみたい」の得票に強く影響を及ぼした可能性が考えられる。

このことから、以下のように分析と考察の結果をとりまとめる。

表-2に示した「6のパターン」への適合度と、観光地の総合的な魅力との間には、正の相関関係が認められる。この相関関係は、登別・由布院・草津の3観光地のプロットを除外すると大きく強まる。したがって、観光地の総合的な魅力は、今回仮説として示した屋外公共空間に関する「6のパターン」によってのみ決まるものではな

いが、この「6 のパターン」への適合は、観光地の総合的な魅力と少なからずの関係があると考えられる。つまり、観光地の総合的な魅力に関し、6 のパターンへの適合度はよいバロメーターとなると示唆される。

2. 4 一般の街歩き型観光地を対象とした「6 のパターン」への適合度評価の試行

一方で、これまで述べてきた「6 のパターン」の仮説、および 2.2~2.3 節の分析は、ともに温泉街型の観光地を対象としたもので、したがって、温泉街型以外の一般の観光地にも適用できるという証左は得られていない。

そこで、表-3 に示す 10 の観光地を対象として、新たに現地調査と、「6 のパターン」への適合度評価の試行を行った。対象とした観光地は、徒歩圏規模、観光地の独立性といった条件を継承しつつ、全国で評価の高い街歩き型の観光地から選定したものである。調査および評価の対象は表-3 に示した調査対象エリアおよびその中核を中心として、徒歩圏規模の範囲（おおよそ半径 500m 程度）の範囲である。

表-3 調査の対象とした観光地の一覧

調査対象観光地		
観光地名	調査対象エリアまたはその中核	所在地
会津若松	七日町通り	福島県 会津若松市
小布施	修景地区	長野県 小布施町
長浜	黒壁スクエア	滋賀県 長浜市
近江八幡	八幡堀	滋賀県 近江八幡市
松江	京橋川・カラコ工房・松江城	島根県 松江市
津和野	殿町通り	島根県 津和野町
倉敷	美観地区	岡山県 倉敷市
宮島	厳島神社参道	広島県 廿日市市
萩	堀内・城下町エリア	山口県 萩市
門司港	門司港レトロ・船溜まり	福岡県 北九州市

用いた評価基準は表-1のとおりで、表中に注記したとおり、2.2 節の 12 温泉街型観光地を対象として行った分析の際とは、ごく一部を修正して用いている。

10 観光地、6 のパターンへの適合度の評価結果は表-4 のとおりである。小布施・近江八幡・倉敷・門司港の 4 観光地が 7 点以上となり、長浜・津和野・宮島の 3 観光地が 6 点台、以下、萩と松江が 5 点台で続き、会津若松のみ大きく離れた結果となった。したがって 10 の観光地のうち、7 の観光地が適合度 6.0 点以上、9 の観光地が 5.0 点以上と、調査対象とした観光地の多くでは「6 のパターン」への適合度が高い傾向にあった。

一方、各パターンごとに見てみると、いずれの観光地でも評価が高いのは、「4. 景観に優れた適度な長さの散策路」「5. 散策や滞留の拠点となる広場等」「6. 歩行者優先の街路空間」の 3 つであった。また、「3. 観光地のアイデンティティとなる象徴景」については、◎評価こそないものの横並びの傾向であった。

各観光地で差がついたのは、「1. 屋外での時間の過ごし方」と「3. 豊かな自然と一体化した街並み」の 2 つであった。前者については各観光地で取り組みに違いがみられることを示している一方、後者については、自然環境は豊かでないが魅力的な観光地もあり得るということを示しているように考えられる。

3. 本年度（平成 29 年度）の研究成果

昨年度までの研究の成果から、「観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間のパターン」の試案として、温泉街型観光地の事例調査をベースに前掲の図-2 が抽出された（2.1 節）。また、これらの「パターン」への適合と観光地の魅力の関係には正の相関が確かめられたこと（2.3 節）、観光地評価のケーススタディ等を通じてこれらの「パ

表-4 10 観光地の「6 のパターン」への適合度の評価結果

	会津若松	小布施	長浜	近江八幡	松江	津和野	倉敷	宮島	萩	門司港
1. 屋外での時間の過ごし方	×	◎ オープンガーデン	◎ 黒壁巡り	○ 八幡堀 遊覧船	○ 堀川 遊覧船	×	○ 倉敷川 舟流し	△ 門前町(店舗)	×	×
2. 観光地のアイデンティティとなる象徴景	△ 若松城	○ 栗の小径	○ 黒壁スクエア	○ 八幡堀	△ 松江城・堀川	○ 殿町	○ 美観地区	△ 厳島神社・紅葉山	○ 鍵曲・城下町	○ 船溜まり
3. 豊かな自然と一体化した街並み	×	◎	×	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎
4. 景観に優れた適度な長さの散策路	△ 七日町通り	◎ 修景地区界隈	◎ 黒壁スクエア界隈	◎ 八幡堀遊歩道	○ 京橋川周辺	◎ 殿町界隈	◎ 倉敷川 等	◎ 海岸沿い遊歩道	○ やや冗長	◎ 船溜まり界隈
5. 散策や滞留の拠点となる広場等	○ 七日町市民広場	○ 笹の広場	○ Cafe 96	○ 八幡堀親水広場	○ カラコ広場等	◎ 橋詰であい広場	◎ 今橋 等	◎ 海岸沿い遊歩道	△	◎ 船溜まり周辺
6. 歩行者優先の街路空間	×	○ 修景地区内	○ 黒壁スクエア	○ 八幡堀周辺	○ 京橋川周辺	○ 殿町通り周辺	○ 美観地区	○ 参道・遊歩道	○ 堀内・城下町	◎ 船溜まり地区
上記6のパターンへの適合点数（最大9.0）	2.0	7.5	6.0	7.0	5.5	6.5	7.5	6.5	5.0	7.0

ターン」が温泉街以外の一般の観光地にも適用可能と考えられること（2.4節）などを確認した。

本年度は、具体の観光地の空間整備事例と「6のパターン」との照合を行うとともに、それらを掘り下げるかたちで観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間の要素・要因の候補を整理した（3.1節）。また、一般の国内旅行経験者を対象としたアンケート調査を実施し、最近訪れた国内観光地での滞在体験とその評価などについて尋ね、観光地の魅力との関係について分析を行った（3.2節）。さらに、観光や景観を専門とする全国の有識者に参加いただき意見交換会を実施し、観光地の魅力を構成する要素について、各委員からご知見をもとにご意見を伺った（3.3節）。これらを踏まえ、「6のパターン」について、項目の拡張を行うとともに、パターンの分類整理を行った（3.4節）。

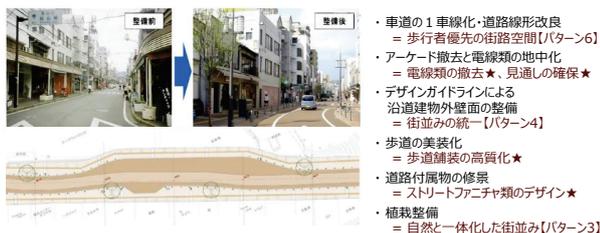
3.1 観光地等の空間整備事例との照合

近年空間整備が行われ、整備後の空間について高い評価を得ている観光地等については、それらの整備の内容が観光地等の魅力向上に寄与している可能性がある。

そこで、都市景観大賞⁸⁾や土木学会デザイン賞⁹⁾、既存の事例集などを参考に、評価の高い公共空間の整備事例を収集し、それらの整備内容と「6のパターン」の照合を行うとともに、「6のパターン」に該当しない整備項目の抽出を行った。

調査の対象とした公共空間の整備事例、および「パターン」との照合結果を一覧に表-5に示した。図-4には収集事例の一例として、公共空間整備の概要、整備内容の抽

整備事例：松山市 ローブウェイ通り



整備事例：長野市 善光寺表参道商店街（中央通り）



図4 各観光地等の整備事例調査における公共空間整備内容の抽出および「パターン」との照合の一例

出、「6のパターン」との照合の一例を示した。

この調査から以下のことが明らかになった。

- 各整備事例における整備内容と照合すると、「6のパターン」に含まれていないものとして、A.高質な空間整備、B.道路および沿道のベンチ等、C.街並みの統一、D.電線類の撤去・見通しの確保といった項目が見つかった（表-5 下方）。
- いずれの整備事例でも、整備前と整備後を比較して、当初の6項目（パターン）および新たな4項目への適合度が大きく増大している。
- 特に、A.高質な空間整備、C.街並みの統一、D.電線類の撤去・見通しの3項目はいずれの事例でも適合度が高い。
- 北九州、草津、鶴岡の事例では、整備内容と当初6のパターンとの適合度が非常に高い。
- 松山、長野、川越の事例では、当初6項目との適合度が6点を下回っているが、「5.散策や滞留の拠点となる広場等」や「6.歩行者優先の街路空間」といった項目との適合が低めである。
- これらの3事例（松山、長野、川越）は地区を貫く幹線的な街路1本を主たる対象とした整備であり、こういった事例では、ゆとりある歩行者空間・滞在空間を十分に確保することが難しいことを示唆していると考えられる。

3.2 アンケート調査

一般の国内旅行経験者を対象としたアンケート調査を実施し、最近訪れた国内観光地での滞在体験とその評価、観光地の象徴景写真に基づく観光地評価、案内サイン等の多言語表記化による観光地評価の変化等について把握を行った。

3.2.1 アンケートの方法

民間のインターネットリサーチ会社に委託してのウェブアンケート調査による。

実施時期、回答者数などのアンケート諸元は表-6のとおりである。

3.2.2 アンケート結果：国内観光地での滞在体験とその評価について

過去の観光体験から印象的だった観光地1つを回答してもらい（提示選択肢30個および自由記述による回答）、その観光地の評価や、観光地での滞在体験の内容について尋ねた。このうち、20票以上の回答があった観光地の

表-5 観光地等の公共空間整備事例から把握された整備内容と「パターン」およびその構成要素との照合

整備事例	松山市 ロープウェイ通り		伊勢市 おはらい町		長野市 善光寺表参道		川崎市 一番街		北九州市 門司港レトロ		津田町 湯畑周辺整備		鶴岡市 あつみ温泉		
	主な整備内容	受賞歴	従前	事後	従前	事後	従前	事後	従前	事後	従前	事後	従前	事後	
	2005～2006 ・電線類地中化 ・車線縮小 ・舗装・街具 ・街並み整備	2016 都市景観大賞	1990～ 修景保全事業 1992 無電柱化完了 1993 石畳整備完了 1993 おかげ横丁 open		2011～2015 ・電線類地中化 ・歩道拡幅・フラット化 ・舗装・街具 ・休憩施設 2013 景観協定 2005 ばていお大門		1988 町づくり規範 1989～1998 街並み整備(補助) 1991～ 街路整備 1992 電線類地中化 1998 伝建地区指定		1988～1994 ・歴史的建造物保全 ・駅前広場・船にまり ・フロムナード・はね橋 1997～2001 ・海峡プラザ		1998 都市景観大賞 2001 景観デザイン賞	駐車場廃止 2013 湯畑広場 2016 湯畑照明 2017 西の河原公園照明 2010～ ・ガイドサイン ・街並み整備		2002～2008 ・車線縮小 ・電線類地中化 ・舗装・街具 ・足湯・足湯カフェ	
パターン	パターンの構成要素	従前	事後	従前	事後	従前	事後	従前	事後	従前	事後	従前	事後	従前	事後
1. 屋外での過ごし方の提供	「過ごし方」の内容	×	△	△	△	△	△	△	△	×	○	△	◎	×	◎
	商店街 ○○巡り オープンカフェ 遊覧・アクティビティ その他	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
												○	夜のそぞろ歩き		
												○	足湯		○
2. 観光地のアイデンティティ化する象徴景	象徴写真に含まれる要素	×	◎	×	○	○	○	○	○	×	◎	△	◎	○	◎
	ランドマーク 街並み 自然・風物 人々 その他				○	○	○	○	○			○	○	○	○
												○	足湯		○
3. 豊かな自然と一体化した街並み	関連する構成要素	×	○	○	○	○	×	×	○	◎	△	◎	◎	◎	
	並木 街路樹 樹林 庭木・高木 草花 せせらぎ・水面 里山・山林 遠望できる山並み その他				○	○	○	○	○	◎	○	◎	○	○	
4. 景観に優れた適度な長さの散策路	散策路の構成	×	◎	×	◎	×	◎	×	◎	×	◎	×	◎	◎	
	街並み・風情 自然 メインストリートに一致 メインストリートに接続 ループ・ネットワーク型 その他				○	○	△	○	△	○	○	○	○	○	
5. 散策や滞留の拠点となる広場	広場等の構成	×	×	×	◎	△	△	×	×	×	◎	◎	◎	◎	
	滞留スペース ベンチ等 立地 眺望・象徴景との一致 その他				○	○	○	○	○	○	○	◎	◎	◎	◎
6. 歩行者優先の街路空間	主要な街路空間の状況	×	○	×	○	×	△	×	×	◎	△	◎	×	○	
	歩行者専用 歩行者優先(実質含む) 歩車分離(フラット) 歩車分離(緑石等区分) ▲絶え間ない車の往来 ▲路上駐車 ▲沿道駐車場 その他				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
A. 高質な空間	整備箇所	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	△	○	×	○
	歩道舗装 車道舗装 街具等 その他				○	○	○	○	○			○	○		○
B. 道路および沿道のベンチ等	休憩施設等の配置	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	固定式ベンチ等 可撤式イス・縁台 道路上の滞留スペース 軒先の滞留スペース その他				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
C. 街並みの統一	沿道ファサードの統一	×	○	×	○	×	△	△	○	×	△	×	○	×	△
	その他				○	○	○	○	○						○
															○
D. 電線類の撤去・見通しの確保	電線類の撤去	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○
	見通しの確保 その他				○	○	○	○	○						○
集計	パターン1～6との適合度	0	5.5	1.5	6.5	1.0	3.5	1.5	4.0	1.0	8.5	3.0	8.5	2.5	8.5
	パターンA～Dの充足数	0	3.0	0	3.0	0	3.5	0.5	3.0	0	3.5	0.5	3.0	0	3.5

み抽出し、分析の対象とした。これら 20 票以上の回答があった観光地は図-5 の 10 観光地である。

設定した設問の一覧は表-7 のとおりであるが、ここでは一部のみ結果と考察を紹介する。

前掲の図-5 は、観光地内での滞在時間を尋ねた結果である (Q2)。温泉街観光地のうち、道後温泉と城崎温泉では、1泊2日以上での滞在が9割近くを占める。これらの温泉街では、訪れるなら1泊で、というのが浸透していると考えられる。一方、2泊以上での滞在が多いのは由布院、道後温泉、阿寒湖である。それ以外の観光地では宮島、伊勢、小樽の順で1日以下の滞在の比率が高いが、これには域内の宿泊施設の充実等も影響していると考えられる。

図-6 は、観光地での滞在の方法 (時間の過ごし方) を尋ねたものである (Q4)。多くの観光地で「街歩き」の回答率が高い一方、阿寒湖では「街歩き」の回答が少なく代わりに「自然を楽しむ」の回答率が高い。登別温泉では「街歩き」「自然を楽しむ」のいずれの回答率も低く、総じて屋外環境下での滞在体験の占める比率が低い。

表-7 の設問のうちの Q5 は、当初試案としての「6 のパターン」に対応して、それぞれの観光地の評価を尋ねたものである。図-7 はこのうちの Q5-4 「地域を楽しく散策・周遊できる」に対する回答で、「パターン4：景観に優れた適度な長さの散策路」に対応する。ここではまた

表-6 アンケート調査の概要/諸元

調査方法	ネットリサーチによる調査(リサーチ会社:(株)マクロミル)	
実施期間	平成 30 年 3 月	
回答者数	648	
モニター抽出条件	①世帯年収 400 万円以上かつ「旅行が趣味(国内宿泊旅行が年一回以上)」 ②各年代(3 区分)及び居住地(8 地方)が概ね均等になるように配慮	
設問内容	回答者ごとに A と B のいずれか 1 パターンを提示(半数ずつ)。	
設問	A パターン	B パターン
1. 写真およびフォトモニターによる観光地の印象評価	8 写真×5 問	8 写真×5 問
2. 過去に訪れたことがある観光地の印象評価および散策の結果	20 問(共通)	
3. 写真およびフォトモニターによる観光地のサイン評価	4 写真×5 問	4 写真×5 問
4. アンケートに対する自由意見	1 問	1 問
計	81 問	81 問

※その他事前調査(5 項目)および基本属性(8 項目)

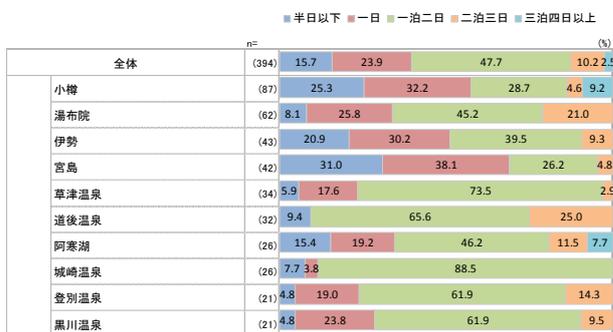


図-5 「過去に訪れたことがある国内観光地のうち最も印象的だったもの」の回答上位 10 観光地 (回答数 20 票以上) およびその時の滞在時間 (Q2)

表-7 国内観光地での滞在体験とその評価に関する設問の一覧

設問	設問の主旨・概要	設問文	回答の選択肢の例
Q1	訪問回数	その観光地には何度目の訪問でしたか?	1回目・2回目・3回目・・・10回目以上
Q2	滞在時間	その観光地内での滞在時間は?	半日以下・1日・1泊2日・・・3泊4日以上
Q3	魅力	その観光地の魅力は?	美しい街並み・豊かな自然・宿泊施設での滞在・・・
Q4	過ごし方	ここでは今回どのように過ごしましたか?	街歩き・自然を楽しむ・宿泊施設でゆっくり・・・
Q5-1	観光地の印象	「パターン1」 地域を散策したくなる魅力・動機がある	大変そう思う・・・全くそう思わない
Q5-2		「パターン2」 個性的で優れた風景・景色がある	〃
Q5-3		「パターン3」 緑豊かな街の雰囲気	〃
Q5-4		「パターン4」 地域を楽しく散策・周遊できる	〃
Q5-5		「パターン5」 思わず立ち寄りたくなる広場・公園がある	〃
Q5-6		「パターン6」 車に邪魔されことなく、歩行者優先で安全に歩ける	〃
Q6	散策の有無	訪れたその観光地で散策を楽しみましたか?	散策を楽しんだ・楽しまなかった
Q7	散策の理由	なぜ散策をしようと思いましたか?	点在する目的地や観光スポットを巡るため・特にあてはなく・・・
Q8	屋外での休憩時間	散策中の屋外での休憩のうち、最長のは?	3分以内・10分以内・・・1時間よりも長い・屋外で休憩しなかった
Q9	休憩の場所(空間)	その屋外休憩の場所は?(1)	広場公園・道路上・橋の上・店の軒先・・・
Q10	休憩の場所(設備)	その屋外休憩の場所は?(2)	イスベンチ・テーブル付きのイス・・・何かに寄りかかって・立ったまま
Q11	休憩の過ごし方	その屋外での休憩の過ごし方は?	最低限の休憩・風景を眺める・飲み物を飲む・食事をする・・・
Q12	休憩の満足度	その時の屋外休憩の感想は?	大変居心地がよかった・・・大変居心地が悪かった
Q13	屋内での休憩時間	散策中の屋内での休憩のうち、最長のは?	3分以内・10分以内・・・1時間よりも長い・屋外で休憩しなかった
Q14	休憩の場所(空間)	その屋内休憩の場所は?(1)	飲食店・施設内の休憩スペース(無料)・滞っているホテル旅館の部屋・・・
Q15	休憩の場所(設備)	その屋内休憩の場所は?(2)	イスベンチ・テーブル付きのイス・・・何かに寄りかかって・立ったまま
Q16	休憩の過ごし方	その屋内での休憩の過ごし方は?	最低限の休憩・風景を眺める・飲み物を飲む・食事をする・・・
Q17	休憩の満足度	その時の屋内休憩の感想は?	大変居心地がよかった・・・大変居心地が悪かった
Q18	訪問前の期待度	訪問前のその観光地に対する期待度は?	非常に期待していた・・・全く期待していなかった
Q19	訪問後の満足度	訪問後のその観光地に対する総合満足度は?	大変満足・・・大変不満
Q20	再来訪意欲	その観光地についてまた訪れたいと思いますか?	大変そう思う・・・全く思わない

登別温泉の評価が低く、これは過去の適合度評価結果(表-2)と一致する。草津温泉も同様に評価が低い、こちらは表-2の結果とは一致しない。これには草津温泉で大規模な整備が近年(平成22年以降)に実施されており^{10) 11)}、表-2の結果はこれを反映したものとなっている一方、今回のアンケートではそれ以前の訪問経験に基づく回答が含まれている可能性が考えられる。

図-8は、Q7にて散策の理由を尋ねた結果である。道後・草津・城崎・黒川では「特にあてはなく…」の回答率が高い。これらの観光地では、特段の目的がなくても散策を誘発するような環境が実現されていると推察される。



図-6 Q4「観光地でどのように過ごしましたか?」に対する回答率(複数回答可)と、観光地別の集計

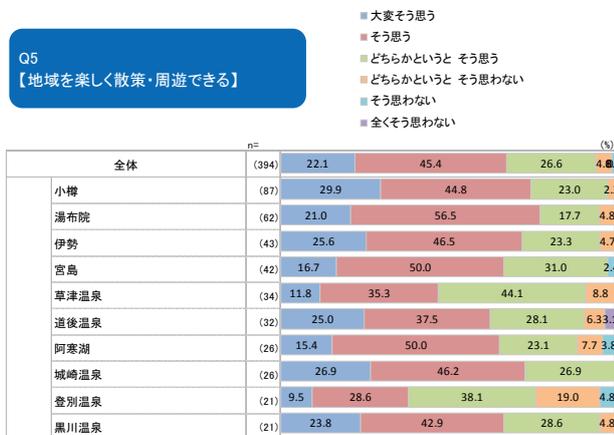
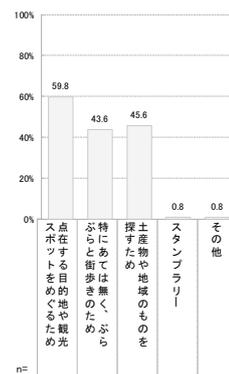


図-7 Q5-4「地域を楽しく散策・周遊できる観光地と思うか?」に対する回答と、観光地別の集計



観光地	スホットをめぐりながらの観光	特にあては無く、ただ歩くため	探すための地域のものを	スタンプラリー	その他
全体	59.8	43.6	45.6	0.8	0.8
小樽	65.9	39.0	67.3	1.2	0.0
湯布院	62.0	45.6	36.8	0.0	0.0
伊勢	82.0	9.8	51.2	0.0	0.0
宮島	77.5	40.0	37.5	0.0	2.5
道後温泉	64.0	64.8	41.9	0.0	0.0
草津温泉	37.9	69.0	44.8	0.0	0.0
城崎温泉	33.3	66.3	54.2	8.3	8.3
阿寒湖	72.2	33.3	44.4	0.0	0.0
黒川温泉	37.5	76.0	25.0	0.0	0.0
登別温泉	46.7	46.7	40.0	0.0	0.0

図-8 当該観光地での散策の理由を尋ねる設問(Q7)への回答結果(複数回答可)と、観光地別の集計

図-9は、Q18訪問前の期待度、Q19訪問後の満足度、Q20再来訪意欲の各設問への回答結果を、大変そう思う=5点、そう思う=4点...全くそう思わない=0点としてポイント化して一覧に示したものである。再来訪意欲が高いのは伊勢および黒川温泉で、期待度に対する満足度が特に高いのは宮島および城崎温泉という結果となった。

図-10は、このうちの各観光地に対する再来訪意欲のポイントと、Q5の「6のパターン」に対応した観光地評価の回答結果を同様にポイント化したものとの対応を図化したもの、図-11は同様に、表-2および表-4の「パターン」への適合点数との関係を図化したものである。いずれにおいても、プロットに対して右肩あがりの近似直線が引けるが、より相関が強いのは図-11である。

これらから、表-2および表-4に示した各観光地の屋外公共空間の「6のパターン」への適合度、あるいは今回のアンケートによる「6のパターンに対応した印象」の評価と、各観光地の再来訪意欲は比較的高い正の相関関係にあると確かめられた。

3. 2. 3 アンケート結果: 多言語表記サインに対する印象について

外国人観光客の集客向上を目的に、観光地整備において案内サイン等の多言語表記が検討されることは多い。しかしながら、それはサイン盤面の拡大、記述内容及びデザインの複雑化、相対的な情報量の低下など、種々の問題を生みうる。

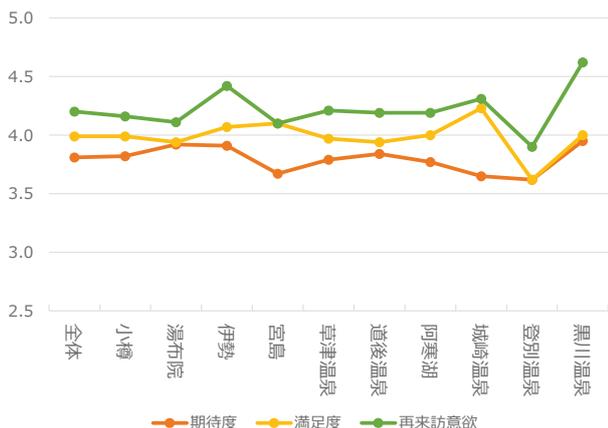


図9 各観光地における訪問前の期待度、訪問後の満足度、再来訪意欲の回答結果

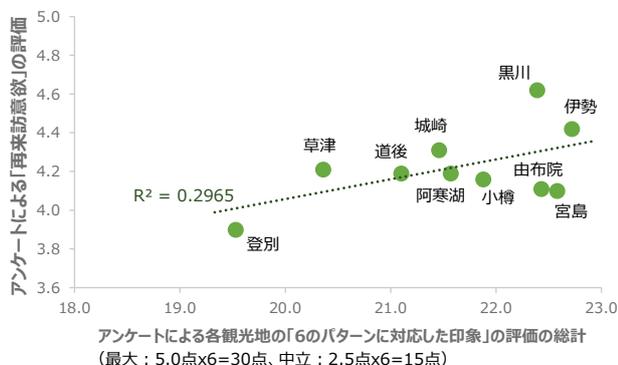


図10 各観光地の「6のパターンに対応した印象」の評価と「再来訪意欲」の評価の関係

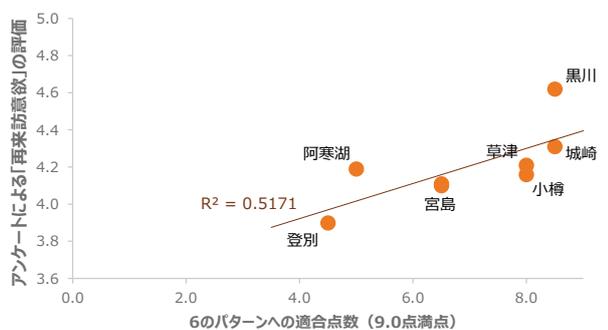


図11 パターンへの適合点数と「再来訪意欲」の評価の関係

そこで、日本の観光地における日本語表記サイン (図-12の写真E) を、英語との2カ国語表記化したもの (同写真F)、中国韓国語を含めた4カ国語表記化したもの (写真G)、ピクト表記化したもの (写真H) を作成して、それぞれに対する印象を尋ねた。また同様に、海外観光地のサイン等 (写真I) に日本語表記を付加したもの (写真J) なども作成して、これに対する印象を尋ねた。

結果の抜粋を図-13に示す。写真E~Hのうち、英語



図-12 サインに関するアンケート調査に用いた写真の一例

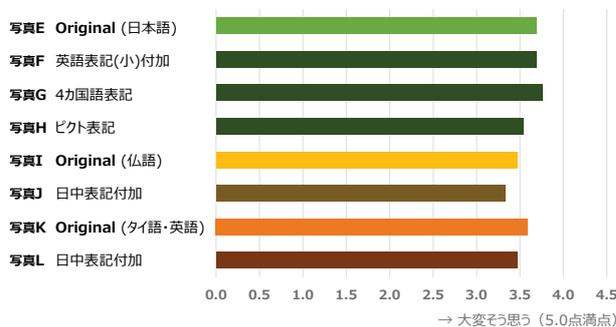


図-13 サインの表記言語追加による観光地評価の変化 (設問: 「写真の観光地に行ってみたいと思いますか?」)

表記を小さく付加したもの (写真F) については、日本語表記のみのオリジナル (同E) と評価に大差がないが、4カ国語表記版 (G) は評価がやや高く、ピクト表記版 (H) は評価が低かった。

同様に、海外観光地のサイン写真については、現地語・英語表記のみのオリジナル版 (写真I、K) に、日本語を含めた表記を追加したもの (写真J、L) については、オリジナル版に比較して評価が低くなった。

これらのことから、必ずしも自国語表記のあることがその国の旅行者にとって観光地の魅力向上につながるとは限らないし (写真I~L)、多言語表記化によって、逆にその観光地の雰囲気損ねる結果にならぬよう、要不要や表示方法を適切に判断してこれを整備する必要があるといえる。

3.3 有識者意見交換会

観光地の魅力と屋外公共空間のデザインの関係や、観光地の魅力向上に寄与する観光地の要素・要因について、寒地土木研究所の仮説 (6のパターン: 図-2) をたたき台に、景観および観光に関する学識有識者の方々に議論いただくこととした。

意見交換会は3回実施し、各回3名の学識有識者の方に参加いただき、計9名の方に参加いただいた(写真-1)。開催日時および参加者は表-8に取りまとめたとおりである。

意見交換会では、屋外公共空間や提示した仮説の枠に必ずしもとらわれない広い見地からの意見を求め、「観光地の魅力に寄与する要素・要因」や「観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間のパターン」について、表-9に示すような意見を得た。

これらの意見を踏まえ、再度検討した研究の方針は以下のとおりである。

- ・仮説としていた各パターンの趣旨については、各先生方のご知見・ご見識と照らし合わせても違和を感じるのと指摘はなかった。
- ・ただし、パターンの整理の方法については、パターンのヒエラルキー(上位の抽象的パターンから下位の具体的パターンまでの構成)を含め、精査が必要。
- ・観光地の屋外公共空間は、当該観光地でのほぼすべての体験の器となるものであるが、そこで営まれている生活やライフスタイルといったものも観光地の魅力に対して大きなウェイトを占める。
- ・生活や暮らしという観点からは、屋外公共空間に求められるデザイン(パターン)を、それら観光地で可能な時間の過ごし方の観点から捉え直す方向もあり得る



写真-1 意見交換会の開催状況 (第1回・第2回)

表-8 意見交換会の開催概要

日時・場所	参加有識者	議題
平成30年2月26日(月) 10:00~12:30 場所: 日本大学お茶の水校舎 11階会議室	景観分野 3名 ・ 大学教授(景観) ・ 大学教授(景観) ・ 大学准教授(景観)	1. 趣旨説明 2. 意見交換の素材提示 ・ 寒地土木研究所における研究成果の説明 ～ 議論のたたき台あるいは呼び水として
平成30年3月8日(木) 16:00~18:30 場所: 自由学園 明日路 RM1925会議室	観光分野 3名 ・ 大学教授(観光) ・ 大学准教授(観光) ・ 調査研究機関 主任研究員(観光)	3. 事例紹介: 各委員 ・ 各委員の考える魅力的な観光地の事例とその魅力要因 4. 意見交換 テーマ1: 観光の魅力の構成要因について テーマ2: 観光地の屋外公共空間の課題及び望ましいあり方について テーマ3: 国内外の観光地の差について テーマ4: 望ましい観光地事例の抽出方法について テーマ5: 寒地土木研究所における今後の研究のあり方について
平成30年3月13日(火) 13:30~16:00 場所: 札幌エルプラザ2階 環境研究室2	北海道拠点 3名 ・ 大学教授(観光) ・ 大学特任教授(地域づくり) ・ 設計事務所代表(ランドスケープ)	5. その他

- (上位のパターン/ヒエラルキー)。
- ・同時に、仮説としていた「6のパターン」は観光地の魅力向上に寄与するものとして妥当なものと考えられることから、それらパターンのより個別、より具体的成立条件について検討をすすめる(下位のパターン/

表-9 意見交換会での意見抜粋

意見交換会のまとめ	意見交換会での意見抜粋
<ul style="list-style-type: none"> ・視点や興味ポイントは外国人と日本人では違うため、仕分けも必要ではないか。(景観/札幌) ・魅力は一概ではなく、良い悪いの指標にはならない。観光客の興味も多様化している中で、もともと一概ではわからないものをパターンランゲージでツリー型でやろうとしている所に違和感を感じる。(景観/東京) ・回廊で評価すると観光地の特徴をふまえた評価が難しい。観光地のタイプ分類をした方がよい。もしくは、パターンのウェイトが違ふので、その重みづけも検討したほうが良い。もう少し細かい分析をしていくと共通性がでてくるのでは。(景観/東京) ・海外に穿ちという事ではなく、日本の良さがある。見方を広げて、良い悪いで評価するという方向でいいか。単なる海外との比較ではなく、その共通性があるかないかなどを探るべき。(景観/東京) ・事例の時代背景など、これまでの経緯を調査したほうが良い。観光地の動きによって住民たちの動きが変わったみたいな事例もある。(ヒアリング等) ・魅力的な観光地ができることが目的であれば、厳密性というよりも研究成果の最終的な達成したいことというのを決めた方がつきやすいのではない。(景観/東京) ・アカデミックにアプローチする必要がないとすれば、骨と筋肉に例えれば、道の長さや幅員とか簡単に変わらない部分と骨としたりして、増強するような形での筋肉としてのツボのような技術書とすればいいのではない(景観/東京) ・このパターンを事例に当てはめてビフォーアフターを行うと参考になる。むしろ観光地でない方が他の要素に影響されない。(景観/東京) ・上位から落とししていくには、使ってみようかなという気持ちになることが大事。(景観/東京) ・パターンランゲージのまとめ方・言葉の抽出がとても重要。上位は抽象的で、階層下に行くにしたがって、具象に入ってくるような構成が良い。それが使えらる、使えないに直結する。(景観/東京) ・観光は地域の暮らしやライフスタイルに密接にかかわっている。海外でも人達の暮らししている風景そのもの自体が、そもそも観光資源になっているという事が割合多いと思う。街自体が賑わっている。暮らしの場と観光の場というのをあまり切り離さないところが多いのだと思う。(景観/東京) ・本家の地域の姿とか実際に地元の人々の動きが集まる姿等が見ることが重要。観光地と地域の暮らしは密接に繋がっている。(観光地/東京) ・公共空間というのは、それが、自治体の人たちから言うとう、その地域の暮らしとか魅力的な場所を作るという事に発展する。地域の暮らしの改善にもつながると言う事があるが、前掲として入っていた方が、やる意味を説明できる。観光業は集客がメインであったが、地域の生産・その地域の人々を考えると、良い観光地にもつながる(景観/東京) 	<ul style="list-style-type: none"> ・成立要件を整理し、事実関係をきちんとおさえて、そこから見えてくる中で、重みづけが必要であれば、そこから考える必要がある。二次分析・三次分析に分けて考えればよい。(景観/東京) ・広域で考えるのであれば、違う器が必要になってくるのではないかと感じます。(景観/東京) ・歩行的、ヒューマンスケールのものが重要。地理・地形の文脈、文化に生かされている、無視してないかなど。商業等が立地しているところなどは、観光地として復活する可能性あり(景観/東京) ・住民の地域愛が重要(景観/東京) ・地形・成り立ちが大事(景観/東京) ・良い観光地というのにはリピーターのお客さん、一定割合という事。地域リピーターについての資料をまとめるという事考える(観光/東京) ・地域のリーダー連に責任意識があるかどうかという事が大事。リスクイベントを乗り越えてきた地域は観光地としても強いと考える。(景観/東京) ・リーダーとなる人の調査も大事。(観光/東京) ・言語的なものに基づく観光地(精神的な価値)は1回限り。確認作業。それに比べて食べるとか、温泉に行くとか、夏涼しい風景なんかはリピートされる。(身体的価値) 身体的意味での快活さ、これは1つの重要な要素なので、それはそれで、どこでも適応できる。(観光/東京) ・自分が一番新しいもの、みんなが知らない世界を知っている。みんなが知らない価値を最初体験する。それが観光の基本的な原理。観光地は消耗する。新鮮度が便利になった近隣の観光地が衰退するように、大量の輸送機関が人をどんどん吸い取るとその価値はどんどん消費されてしまう。(観光/東京) ・人との関わりがあると、地域の人と縁が出来るという事。(観光/東京) ・価値は再生産される。基本は芸術化するということ。名作になって、長く生き続けていくこと。(観光/東京) ・観光地にどういった人がきて発展してきたかという所。その観光地の今の人たちのレベルをあまり超え過ぎるとお客が来ない。(観光/東京) ・夜だとか暗だとか、お化衆をする、化けるという所が日本の要素で、考えるべき要素でもあるのでは。(観光/東京) ・駐車場や花なども重要。(景観/東京) ・現在観光地ではないところでどうやって地域を楽しんでもらおうかって時には、全く違うアプローチになるのでは。そこにも景観と公共空間がかかっているのは、必ずついてくる。(観光/札幌) ・人気のある観光地を類型化してしまっ、どの観光地を遊んだら良いかというアプローチが間違っている。あらゆる観光地の魅力的、景観が魅力的と思われる観光地はデザインランドだった分析すべき(観光/札幌) ・研究の目的、揺るがない目的を、もってちゃんと書いて、研究の骨とすべき。(観光/札幌) ・公共空間をよくなることは、将来 DMU が地域にできた時に協議しないといけないマニュアルでいいと、マニュアルができればいい(観光/札幌) ・すべての地域が観光地になり得る。要するに観光地という概念を変えなければならない。(観光/札幌) ・裏タイトルを考えた方がいい(観光/札幌) ・立地的適正化計画にこのパターン評価を盛り込めることができれば一番いい。日本の大前提を変えずに魅力的な空間を作るには限界がある。(景観/札幌) ・他でできないことも札幌でできることはたくさんある。北海道が持っている資源をただ磨くだけじゃなくて、使い方を提案できるというかなという気はします。(景観/札幌) <p>【6つのパターンについて・参考文献】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・眺望だけでなく、土地の生活文化にすぐ密接にかかわっているようなところが観光地としては面白い。パターン③【自然、豊かな自然と一体化した街並み】の書き方を発案の方が良い。地形のような骨の部分を変えられない、むしろ手の縁をどう作るかが重要(景観/東京) ・パターン④の景観に優れたという部分は必要ないのではない(景観/東京) ・公益財団法人日本交通公社で観光庁と3、4年前に調査事業の中で全国の50の観光地を決めて同じ基準で、企画調査を実施した(観光/東京) ・「Lifull Home」s 総研の『セシユアス・シティ調査』は、ちょっと変わった形の評価軸を持っていて都市の魅力評価を実施している。(観光/東京) <p>【良い観光地とは】※観光地となる可能性のある地域も含む</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上田: 日常の中に観光資源となり得る部分がある ・ブリュンツ(スイス): 日常の生活と観光が切り離されていない ・ハワイ(アメリカ): 都市計画・法制度が参考となる。 ・アムステルダム(オランダ)、ハイライン(アメリカ): 昼と夜で違う魅力を持つ。 ・ポポヴァ(フランス)、アルプス(アルプ地方)、トスカナ(イタリア) 北海道を意識した時に参考にできる観光地 ・ポートランド等(アメリカ) ・フランス: 1%景観法があるためチェックすべき

ヒエラルキー)

- ・空間的魅力は、観光地に限らず、商業施設やテーマパーク、一般の都市や市街地にも求められるもので、そういった意味では今回の研究成果は観光地に限ったものではない可能性があるし、研究の題材も観光地に限る必要はない。
- ・滞在時間、リピート率、リピート意欲、満足度といった指標は、観光地の魅力や持続可能性に関する重要なファクター。

3.4 「6のパターン」の拡張とカテゴリズの導入

3.1節の観光地等の整備事例の調査、3.3節の有識者意見交換会での議論を踏まえ、今年度の検討にあたり仮説としていた「6のパターン」(図-2)について、項目の拡張を行うとともに、上位のパターン/ヒエラルキーの候補にあたるものとして、当該地域での過ごし方の観点から新たに4つのグループを設定した。

整理後の新たなパターンとそのカテゴリ分類は、表-10に示したとおりである。次年度以降はこれを新たな仮説として、さらなる検討に取組むこととする。

4. まとめ

昨年度までの研究の成果として得られていた「観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間の6のパターン」については、観光地の魅力とパターンへの適合の関係の分析などを通じ、少なからずの妥当性があることを確認していた(2章)。

本年度は、具体的な観光地の空間整備事例と「パターン」との照合を行うとともに、それらを掘り下げるかたちで

観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間の要素・要因の候補を整理した(3.1節)。また、一般の国内旅行経験者を対象としたアンケート調査を実施し、最近訪れた国内観光地での滞在体験とその評価などについて尋ね、観光地の魅力との関係について分析を行った(3.2節)。さらに、観光や景観を専門とする全国の有識者に参加いただき意見交換会を実施し、観光地の魅力を構成する要素について、各委員からご知見をもとにご意見を伺った(3.3節)。これらを踏まえ、「6のパターン」について、項目の拡張を行うとともに、パターンの分類整理を行った(3.4節)。

5. 今後の課題と来年度の研究方針

平成30年度以降は、③屋外公共空間の魅力に関する評価・診断(アセスメント)手法の構築、④屋外公共空間の構成要素に関する設計・管理・利活用技術の提案、といった項目について研究を進める計画となっている。

これらに関しては、本年度の研究成果も踏まえ、観光地等の屋外公共空間のうち、特に設計自由度の高い「広場」「休憩スペース」「ベンチ」「沿道および軒先の空間」について、詳細の設計事例の収集と評価を通じ、それらの望ましいデザインのあり方について検討を行う。そのほか、観光地における「屋外広告物」「電線電柱」「街路樹」といった要素についても、過去あるいは現在実施中の別研究の成果も活用して、同様に望ましいデザインのあり方について検討を行う。

また、海外観光客視点での国内観光地の屋外公共空間の評価についても調査を進める。

表-10 拡張・再構成後のパターンの一覧と想定される各敷地における配慮事項の一例

カテゴリ ・パターン	旧パターンとの対応	各敷地における配慮事項の例				
		道路街路	公園・広場	沿道敷地/外構	沿道敷地/建築	自然地・農地
見る：景観・空間の質						
・観光地のアイデンティティとなる象徴景	パターン2					
・域内の緑と周囲の景観への眺望	パターン3	植栽	植栽	植栽	眺望への配慮	・
・整えられた街並み	・	舗装、街具等	舗装、街具等	舗装、街具等	景観の統一(形態、材料、色彩、意匠)	
歩ける：歩ける空間						
・適度な長さの散策路	パターン4					ループ型の遊歩道
・歩行者優先の街路空間	パターン6	歩行者優先の環境づくり	・	駐車スペースの扱い	・	・
休める：くつろげる空間						
・散策や滞留の拠点となる広場等	パターン5	・	立地、眺望	立地、眺望	・	・
・道ばたの休憩空間	・	居心地のよいベンチ	アクセスしやすい休憩空間	ベンチ、木陰緑陰、滞留スペース		
過ごせる：屋外で時間を過ごせる						
・屋外での時間の過ごし方の提供	パターン1		オープンカフェ、足湯	オープンカフェ		遊覧、散策プログラム

参考文献

- 1) 明日の日本を支える観光ビジョン構想会議：明日の日本を支える観光ビジョンー世界が訪れたい日本へー、2016。
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kanko_vision/
- 2) 平成 28 年 3 月 29 日閣議決定：北海道総合開発計画、2017。
http://www.mlit.go.jp/hkb/hkb_tk7_000059.html
- 3) 室谷正裕：観光地の魅力度評価ー魅力ある国内観光地の整備に向けてー、運輸政策研究 Vol. 1 No.1、1998。<http://www.jterc.or.jp/kenkyusyo/product/tpsr/bn/no01.html>
- 4) C. アレグザンダー他著（平田翰那訳）：パタン・ランゲージ [環境設計の手引]、鹿島出版会、1984.
- 5) たとえば、Michelin Apa Publications Ltd. :「The Green Guide JAPAN」、2012。旺文社：ことりつぶ、など
- 6) たとえば、リクルートじゃらんリサーチセンター：じゃらん人気温泉地ランキング 2016 投票結果報告、2015。(株)観光経済新聞社：につぼんの温泉 100 選、など
- 7) リクルートじゃらんリサーチセンター：じゃらん人気温泉地ランキング 2016 投票結果報告、2015。<http://jrc.jalan.net/j/surveys.html>
- 8) 「都市景観の日」実行委員会：都市景観大賞、http://www.mlit.go.jp/toshi/townscape/toshi_townscape_tk_000022.html
- 9) 公益社団法人土木学会景観デザイン委員会：土木学会デザイン賞、<http://design-prize.sakura.ne.jp/>
- 10) 北山創造研究所：草津温泉再興の記録 2010ー2017、草津町、2018。<http://www.town.kusatsu.gunma.jp/www/contents/1519900896434/index.html>
- 11) 草津町：草津町の景観まちづくり、<http://www.town.kusatsu.gunma.jp/www/contents/1492141426920/index.html>